
Muv - Luv Old Soldiers

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v O l d S o l d i e r s

【コード】

N 6 5 0 3 M

【作者名】

空

【あらすじ】

硝煙漂う戦場の地

殺伐とした現実の中、ゆっくりと時を刻む日常風景

それはリアルに埋もれた幸福のページ

FIRST DAY

M u v - L u v O l d S o l d i e r s

〈第1話〉

1995年 満州

「寒い・・・」

穴吹朋は寒さに身を震わせながら、格納庫に隣接する衛士待機所に駆け込んだ。

強化装備の上に冬季戦用の外套を羽織っていても、身を切るような寒さが襲い掛かってくる。氷点下40度。

温暖で穏やかな瀬戸内海性気候に包まれた四国香川で育った朋にとって、ここ満州里の冬はあまりに厳しく地獄にも等しい場所だった。

外套に付いた粉雪も払わずに、待機所の中央に鎮座するダルマストーブに向かって突進する朋。

赤々と燃えるコークスがタツプリと詰められた鑄鉄製のストーブの前だけが、ここ満州里において唯一、彼女に安息をもたらす場所だった。

「朋ちゃん・・・雪、払ってから入ってきてよ。待機所が汚れるでしょ」

濡れた犬のように、ストーブの前で身を震わし雪を落とす朋の姿を迷惑そうに見つめる櫛出悠。

朋が身を震わす度に、床に落ちた雪が熱で溶け、ストーブの周りに小さな水溜りを作りはじめていた。

「あなたは北国育ちで平気かもしれないけど、私は寒くて寒くて死にそうなの！少しは労わりなさい」

しかし、悠の小言にも朋は、まったくストーブの前を動かこうとしない。

逆に平気そうにしている悠に対して悪態までつき始める始末。

新潟出身の悠は、南国育ちの朋より満州里の冬に順応するのが早かった。

「そう言って、いつも床を汚す。朋ちゃんは寒がり過ぎなんだよ。そんなに寒ければ、ずっと管制ユニットの中に入っていればいいじゃない。」

自分の機体なら濡らそうが汚そうが朋ちゃん自由だよ」

まあ、管制ユニットをビショビショに濡らしたりしたら刈谷大尉に殺されるだろうけどねと、付け加えながら言い返す悠。

その白磁の肌が、ほんのりと朱に染まっているのは、なにもストーブの熱だけではない。

いくら温厚な者であろうと部屋を幾度も汚されては怒りもする

「私の撃震、空調の調子が悪いの。暖房が効くなら、こんなとこまで歩いてこないわよ」

怒る悠に対して、朋は煩わしそうに応えた。

BETAの奇襲に備えて待機するF-4J「撃震」は4機。

その内2機は格納庫ではなく屋外に仮設されたアラートハンガーに起動状態で駐機され、5分以内の出撃を可能としていた。

その為、格納庫に隣接する衛士待機所に来るまでは、僅かとはいえ外を通らなくてはならない。

このアラートハンガーへの移動が晴れた日ならともかく、今日のように雪が降っている日は衛士や整備員にとって大きな負担となっていた。

「また故障？満州里に展開してから何度目よ。刈谷大尉にきちんと言ったの？」

「勿論言ったわよ。だけど余裕がない！の一言でバツサリ斬られて終わった」

悠の言葉に朋は、自分の首を手の平で掻き切るようにして見せる。満州里の冬は、人だけではなく機体の方にも大きな負担を与えていた。

部隊の撃震は、特注の寒冷地仕様機にも係わらずオイルクーラーの凍結などトラブルが続出していた。

戦闘以外で消耗していく戦術機に、なんとか稼働率を上げようと整備班に求められる労力は天井知らず状態で、整備班を束ねる刈谷正吾大尉を筆頭に整備班は連日連夜の激務を強いられていた。

「優先すべきは戦闘力の確保。居住性は後回しか……。暖房が効

いて弾が出ない機体より暖房が効かなくても弾が出る機体の方がいいよね」

居住性も大事な性能の一つかもしれないが、さすがに弾が出ない機体で出撃する訳にはいかない。

しょうがないねと溜息を漏らす悠。

しかし、ストーブの前で未だ寒さに震える朋は、たとえ長刀だけになっても寒いよりはいいとブツブツ文句を漏らす。

そもそも帝国陸軍がこんな辺境、それも他国に展開する必要は本来ありえないことだった。

満州が帝国の支配下にあつたのは過去の話。「満州は帝国の生命線」と謳われていた頃から、はや半世紀が経ち、今では満州という言葉の意味さえ理解できぬ者たちがあらわれようとしていた。

日本帝国にとって、もはや過去の記憶となりつつあつた満州の地。そんな満州でも僻地といふべき満州里に朋や悠、日本帝国陸軍が展開する原因、それはBETAと呼ばれる異星生命体による地球侵攻によるものだった。

1978年、カシユガル降下に端を発したBETA地球侵攻。

圧倒的な物量と、光線級と呼ばれる新種によつて人類は劣勢を強いられ、僅か20年あまりでユーラシア大陸の大半を喪失、その圧倒的ともいえる戦力の前に、滅亡の縁へと立たされようとしていた。そんな人類危急の折、崩壊しつつある中国軍を支援する為、1990年、帝国軍の大陸派遣が決定。朋たちが所属する第50戦術機甲戦隊もまた満州防衛の為、はるばる日本からやって来たのだった。

「こんなので第3中隊最強エースだもんね・・・従軍記者にでも見られたらどうすのよ」

「文屋さんも、この雪じゃあお休みだよ。

それにエースだなんて止めて。アンタだってこの前、要塞級潰して感状もらったじゃない。あれで何体目よ？」

「うーん・・・260かな」

朋の問いかけに、思い出すように答える悠。

「でしょ。撃墜王だの名人だのと祭り上げられても、一向に戦況は良くなり。それに対BETA戦において、エースの条件ってなによ？」

要撃級を5匹倒せばいいの？まさかね・・・。もし、そうなら世界中エースで溢れかえっているわ」

自虐的な笑みを浮かべる朋。世界中で戦争しているのだ。

500倒しても5000倒してもBETAは無尽蔵に湧き出てくる。

「朋ちゃんはクールだね。私は大事だと思う。たとえば、それが無意味なものであっても・・・仲間や銃後の国民達に希望与えるのは必要なことだと思うよ」

「悠は優しいね。その分、もっと私にも優しさを与えて欲しいものだよ」

「これ以上、甘えられても困るよ。朋ちゃんは悲観的すぎる。そんなことじゃあ戦意不足で督戦隊に後ろから撃たれるよ」

「あんなものが、うちにも出来たら日本は終わりだよ。それに私を外すなんて余裕は、ここにはないわ」

督戦隊。ソ連や人民軍には戦意不足の部隊を心置きなく前進させる為の部隊が存在していた。

最高の装備を与えられながらも、その火力を指向する先は敵ではない。

あくまでも友軍を戦わせる為に存在する異端の存在。

「天に負け、人に負け、最後はBETAにも負ける。最悪の筋書きだよ。」

そうならないようにも私たちが頑張つて、ここで侵攻を食い止めないとね」

満州が落ちれば、次は朝鮮。

そして、朝鮮が落ちるようなことがあれば、帝国に残された道は本土決戦しかない。

そうね。と悠の言葉に同意しながら立ち上がる朋。

いつのまにか、あれほど降っていた雪が止み、雲間から光が差し込んでいた。

太陽の光が、純白の大地に放射状に降り注ぎ、その様子は空から梯子が掛かっているかのようにも見える。

白い大地にかかる光の階段。その幻想的な風景に二人は、しばし見とれた。

「ヤコブの梯子だね」

自然が作り出す美しい情景にポツリと漏らす悠。

しかし・・・

「旧約聖書創世記第28章12節。降りてきたのは天使でなくて悪魔だったけどね」

「朋ちゃん・・・」

秀困気をぶち壊す朋を、嗜めるように悠は睨みつけた。

天候が回復すれば、また戦闘哨戒（間引き）が再開される。

畜生・・・ここは、こんなにも静謐で綺麗なのに・・・。

白銀の大地の先に潜む異形のバケモノ達、朋は心の中でBETAに罵声を浴びせた。

翌日、天候は回復。

早朝から第50戦術機甲戦隊は、戦闘哨戒を再開しようとしていた。朋は悠と連れ立って作戦指揮所に出頭する。

学校の教室のような秀困気の作戦指揮所。

大きなホワイトボードにトラペア。椅子には小型の机がついている。彼女達が部屋に入った時には、既に50戦隊に所属する衛士全員が集まっていた。

しかし、全員が集まっているはずなのに部屋は閑散としたものだった。

並べられている椅子の数に反して空席が目立つ。その数は部屋に置かれた椅子の半数近かった。

「随分と減ったね……」

「明日は我が身だよ。余計なこと考えないことね」

「朋ちゃん……」

周囲を見回しながら呟く悠に、朋は煩わしげに頭を振る。

椅子の数は、戦隊に所属する衛士と同数。

椅子が空いているということは、座る者が死んだことを意味する。

「死の8分間」と称されるように対BETA戦は、常に死が隣り合わせの危険な任務だった。

第50戦術機機甲戦隊も満州里進出当初は、50機を越える可動機を保有していたが、現在では一度の出撃で10機も出せば上出来というところまで戦力を激減させていた。今日の出撃も朋と悠のイレメント以外の作戦参加機は僅か4機。部隊全体でも6機という寂しいものだった。

ともに満州里に展開する51戦隊も参加するだろうが、向こうの状況もこちらとさして変わらない。

参加機は10機程度だろう。2個戦隊併せて20機にも満たない参加機。だが、やらない訳にはいかない。

BETAはハイヴと呼ばれる前線基地内の数が一定数を超えると大規模攻撃に打って出る。

そうなってしまうえば終わりだ。消耗激しい人類軍にそれを防ぎ食い止める戦力はない。

生死を賭けたシーソーゲーム。
相手の生産量を超える損失を与え続けるしか方法がなかった。

いまだ有効なハイヴ攻略手段を持たない人類に取って、間引きは唯一と言って良い有効な対BETA戦闘。

戦力が尽きかけようと、BETAを叩き続けなくてはならない。

衛士全員が揃ったのを見計らったように、戦隊を統べる加藤少佐が部屋に入ってくる。

衛士の中で先任である篠原大尉が号令を掛けようとするが、それを手で制する少佐。

加藤少佐も元は、衛士であったが戦闘で負傷して以来、主に作戦立案や部隊戦力の維持管理に務め、部隊の運営にあたっていた。

口数が少なく、顔に残された傷痕から少佐のことを倦厭する者もいたが、現場のことが分かる指揮官として衛士からの人気は高い。

「それではブリーフィングを開始する。気象班の情報では、この晴天は3日ほど続くとのことだ。貴様ら、久しぶりに働いてもらうぞ」

口を開く加藤少佐。晴天が3日続く。これは人類にとって大きなチャンスだった。

いくら戦術機が、悪天候での戦闘が可能とはいえ気象状態が良いにこしたことはない。

気象に縛られる人類と違って、BETAは気象の影響をほとんど受けないことを考えればなおさらだった。

「作戦はいつも通り。我々は中ソ連合軍が喰い損ねた逸れBETAを叩く」

戦隊ごと、さらにはエレメントごとに分けられた担当区域をレーザーポインターで指しながら説明する加藤少佐。BETAの動きは、いまだ判明していない。

偵察衛星や設置式センサー等で索敵を続けているが、広大な戦線をすり抜けるBETA群が後を絶たず、後方陣地や補給線を脅かし、大きな問題となっていた。特に、大規模な間引き作戦を実施した際にはBETAの行動が活性化され、より注意が必要となる。

「運が良ければ遭遇なし。悪ければ足元から奇襲くらって沈という訳だ」

「朋ちゃん・・・声が大きいよ」

ブツブツと文句を漏らす朋を嗜める悠。

戦力が足らず、少ない戦力をさらに分散するしかない現在、戦闘哨戒も安全なものではなくなっていた。

運が悪ければ、たった2機で大隊規模のBETAと殺りあう可能性もある。

その上、間引き作戦が始まれば、光線級も出てくるだろう。

HQの警報が間に合わず、重光線級の奇襲攻撃を受けて散った衛士は数多い。

加藤少佐が負傷したのも、重光線級による超遠距離攻撃が原因だった。

「私が落ちたらちゃんと殺してね。BETAの胃袋に転属なんてしたくないから」

指を鉄砲のようにして、自分の頭を撃つ振りをしながら言う朋。悠は、そんな相棒の姿を見て、嫌そうに顔を歪める。

負傷で済んだ加藤少佐は運が良い。

BETA のど真ん中で撃墜されたら、まず助からない。

例え大破しなくても、跳躍ユニットを失えば生き残る可能性は乏しい。

「・・・穴吹、樫出のペアはD13だ。貴様達が最も進出距離が長い。へマをするな」

いつのまにか加藤少佐の説明は、ペアごとの具体的な説明に入っていた。

朋と悠に与えられた担当区域は「D13」と呼ばれる満州国境近くの最外縁部。

激震の航続距離を考えると、増槽を使用してもギリギリの場所だった。

「努力します」

「穴吹、死ぬことは許さん。必ず帰れ」

欠伸を浮かべながら、ソツポを向く朋に変わり、悠が応える。

朋の態度は、殴られても文句の言えないものだったが、加藤は一言、言うだけだった。

そんな加藤に、ぞんざいに敬礼で応える穴吹朋。

作戦指揮所には乾ききった空気が流れていた。

列線に並ぶ撃震の中、強化装備に身をつつみ、自分の乗機へと向かう朋と悠。

滑走路は、跳躍ユニットが立てる喧騒が支配していた。

彼女たちが乗り込むのを待つ、重厚な戦術機の姿。

77式戦術歩行戦術機「撃震」

90年代に入り、いささか旧式化した感があるが、その抜群の安定性から、まだまだ一線で戦う実力を持った戦術機だった。

悠と別れ、自分の機体の前に立つ朋。

最近出てきた第2世代機と比較し、少しメタボ気味な愛機の周りをグルリと回る。

回りながら、跳躍ユニットに取り付けられた補助翼やノズル、足回りを次々とチェックしていく。クラックや油洩れがないかを確認するのだ。

整備の神様と名高い刈谷大尉の率いる整備班は、高い錬度を誇っているが神様も時にはミスをする。

飛ぶのは自分。信頼はしても信用はしない。

外見の確認が終ると、機体に掛けられた梯子を素早く上り、管制ユニットの中に身を滑り込ませる。ハッチが閉まると同時にシステムを起動。

目覚めたセントラルコンピューターが機体に異常がないかを自動でチェックしていく様子が、文字の羅列として網膜に投影される。

文字の羅列を読み飛ばし、最後に映し出される機体の絵がグリーンなことだけを確認する朋。
どこかに異常があれば、その部分が赤く表示される。オールグリーンなら機体に異常はない。

続いて、サイドスティックを細かに動かし、動作確認。
機体の前にたったランドクルーの手の動きを見ながら、四肢や跳躍ユニットを動かしていく。

段々と出撃準備を整えていく愛機。それは眠っていた鋼鉄の巨人が眠りから覚めていくかのようでもあった。

朋は、通信装置の周波数を切り替え、僚機である悠を呼び出す。

「桃姫（朋）より、屠竜（悠）。通信機を試す。感度どうか？」

「そちらの感度良好。こちらの感度どうか？」

声とともに、網膜に悠の姿が映し出される。密かに羨ましく思っている、濡れた鴉のように真っ黒で癖のない艶やかな長髪に一瞬目を奪われる。

「どうした？桃姫。感度が悪いのか？」

「いや・・・そちらの感度も良好。試し方終わり」

悠の声に、慌てて応えて無線を切る朋。

見とれていたのを咎められたようで、何か気拙かった。

「HQ、こちら桃姫。出撃準備完了、いつでもいける」

「H Q、屠竜、準備よし」

「H Q了解。桃姫、出撃を許可する。滑走路は一番を使え。戦果を期待する」

「桃姫、了解。戦果は保障しないが生きては帰る」

気拙さを隠すように、H Qを呼び出し、出撃許可を取る朋。
彼女の声に併せるように、悠もまたH Qに報告を入れる。

H Qから許可が出るとともに朋は、スロットルをミリタリーに叩き込む。

響き渡るJ79-IHI-11跳躍ユニットの劈くような轟音。
エレメントリーダーの朋を先頭に、2機の撃震が疾走を開始する。

除雪された滑走路脇の雪を舞い上がらせながら、次々と出撃を開始する帝国陸軍戦術機部隊。

人類がBETAに勝利を収め、平和を取り戻す戦いは、まだ始まったばかりだった。

SECOND DAY

一つとせ

人に聞こえし 帝国の

機甲生徒の数え歌

そいつは剛毅だね そいつは剛毅だね

M u v - L u v O l d S o l d i e r s

〈第2話〉

1995年 満州里

晴れ渡った空に、跳躍ユニットのたてる音が、遠雷のように木霊する。

空に見える2つの黒点。芥子粒ほどの大きさだったモノが近づくにつれ、その形を露にしていくな。

近づいてくるのは2機の戦術機。帝国陸軍主力戦術機である77式が、寄り添うように編隊を組み、滑走路に進入してくる。

戦術機が滑走路に近づくにつれ、ますます大きくなる跳躍ユニットの轟音に顔をしかめつつ前島正樹は手にしたカメラを構えた。

レンズに映る撃震の姿。その姿は、出撃した時とは、些か異なりを見せていた。

まず跳躍ユニット補助翼にあるべき燃料タンクがない。

そして、腰周りに付けられている予備弾倉も……。

物資不足が叫ばれている満州里で、衛士が意味もなく燃料タンクを投棄する訳がない。

その上、予備弾倉までないとすれば理由は一つしかない。

「これは、一戦やってきたな……」

カメラのシャッターを素早く切り、駐機場の方へと駆け足で向かう。降りてきた戦術機の持つ追加装甲（盾）には、兵器に不釣り合いな桃を持った美女の姿。

米軍機が施す、派手なノーズアートのような絵が踊っていた。

全世界の軍隊の中でも、お堅いことでは3本の指に入るであろう帝国陸軍の中で、

こんな馬鹿げたパーソナルマークが許されている衛士は数えるほどしかない。

「穴吹中尉と榎出中尉のペアか……これは面白い話が聞けそうだ」

運よく鉢合わせることが出来たと笑みを浮かべる正樹。彼女達は、取材する側にとってこれ以上とない素材だった。

なんせ、相手はトップエース。

その上、今でこそ希少ではなくなったものの女性衛士ということもいい。

「ヒーロー」と「ヒロイン」

どちらが読者の興味を引くかは・・・いうまでもない。

その上、二人は写真を取られることに嫌悪感を抱いていない。

縁起が悪いと写真を取られることを嫌う衛士が多い中、穴吹中尉も樫出中尉も、例えそれが出撃前でも撮影に応じてくれる。

いつ写真を取っても何も言わない。これは大変珍しいことだった。先端技術の粋を集めた戦術機を操る衛士が縁起を担ぐというのもまた滑稽な話だが、正樹は満州里にきて、衛士達が実に繊細な生き物であることを身を持って分からされた。

不用意にレンズを向け、殴り倒されたこともある。

自分が写真を取り、未帰還となった衛士の同僚からは死神扱いも受けた。

彼らは、技術者であり職人でもあるのだ。

厳しい現実の中に身を置きながら、時に実に子供らしい拘りを見せる。

「人事を尽くした後は、天に祈るぐらいしか残されていないという訳か・・・」

呟く正樹の視線の先では、駐機を終えた2機の撃震。整備員が機体に群がり、素早くラッタルを掛けていく。

開かれた管制ユニットから出てきたのは、正樹の予想通り、穴吹・榎出両中尉の姿だった。

降りてきた二人はいつも通り、手に小さめのショルダーバッグを持ち、何事か整備員と話し合っていた。

機体の状況を伝えているのだろう。終るのをじっと待つ。

この後、彼女達は報告も兼ねて指揮所の方へ向かうはずだ。

駐機場から指揮所までの150m、歩いて向かう間が正樹に許された取材時間となる。

待っている間、手持ち沙汰となり暇つぶしに、整備員と話している二人にカメラを向ける。

戦闘警戒を終えた後だというのに、レンズに写る二人の顔は、普段とあまり変化がなかった。

いつもと違うのは、榎出中尉がいつも背に流している黒髪を結わえているぐらい。

ちなみに、肩口で髪を切っている穴吹中尉は、まったくいつもと変わらない。

レンズの先の彼女の顔は、普段と同じように気だるそうな表情を浮かべていた。

彼女は一体、何を考えて戦っているのだろうか・・・？

穴吹中尉の顔を眺めながら正樹は、いつもの疑問が心に浮ぶのを感じた。

正樹にとって、穴吹中尉は不思議な人物だった。

いつもやる気のなさそうな表情を浮かべている。口を開けば、悪態

と皮肉。

穴吹中尉と話していると、誰もが憂鬱な気分させられる。現実的なのか・・・諦めているのか・・・これで戦術機の操縦が下手だったら、とっくの昔に営倉か後方に送られているだろう。

だが、彼女は違う。

満州里に布陣する帝国陸軍第50戦術機甲戦隊最強の衛士。それが穴吹中尉の持つ、もう一つの顔だった。

正樹の視線を感じたのか、レンズの中の穴吹中尉が振り返る。自分の顔を見た瞬間、チシャ猫のように意地悪な笑みを浮かべる彼女。

整備員との打ち合わせを切り上げ、樫出中尉と連れ立ち此方の方に歩いてくる。

「写す時は、前払いって言ったわよね」

穴吹中尉は、前に立つなり右手を突き出した。救いを求めるように、穴吹中尉の隣に立つ樫出悠中尉の方を見るが、彼女も笑っているだけで何も言わない。どうやら助けてくれる気はないようだった。

「まだ撮ってないですよ」

抗議の声を上げるが、穴吹中尉は「んッ！んッ！」と急かすように手を突き出すばかり。

これは何か渡さなければ開放してくれそうもない。

「しょうがないな・・・あっ」

タバコを渡そうと、ズボンのポケットに手を突っ込み、くしゃくしゃになった箱を取り出した瞬間だった。

穴吹中尉の手が素早く動き、箱ごと奪われる。

「ちっ！しけてんな。前島、これ入ってないじゃないの」

「いつも、いつも箱ごとやられてますからね・・・本命はこっちですよ」

穴吹中尉に奪われたのは、ダミーの空箱。人間は学ぶ生き物だ。同じ手は喰わない。

胸のポケットから、一本だけ出して穴吹中尉に渡す。米軍衛士からせしめたラッキーストライク。

国産の誉とはいかないまでも、前線では手の入りづらい本物のタバコだった。

「ケチだな。いつも写真撮らせてあげてんでしょ。タバコの一本や二本ケチらないでよ。火貸して」

ぶつくさと文句を言いながらも、渡したラッキーストライクを口に咥える穴吹中尉。

その上、図々しくも火を貸せと促してくる。今更、中尉の態度に文句を言っても始まらないとジツポを取り出そうとするが、今まで笑っているだけだった櫛出中尉の手によって阻止される。

「はい。前島さんもそこまで。駄目だよ、朋ちゃん。滑走路は禁煙です」

「硬いこと言うなよ、悠。良いじゃない・・・タバコぐらい」

「J P 4にケロシン、36mmと120mm。レアじゃあ済まないよ」

穴吹中尉の口からタバコを奪いつつ言う樫出中尉。

滑走路は火気厳禁。可燃物には事欠かない。安定性の高い弾薬類はともかく燃料は不味い。

「しょうがないですね。穴吹中尉。ここは樫出中尉の言うことを聞いておきましょう」

「ちっ！何時から前島は、悠の下僕になったんだよ」

文句を言いつつも、穴吹中尉はタバコを諦めてくれたようだった。不貞腐れ、樫出中尉と正樹をおいて一人、指揮所の方に歩き始める。

「ごめんなさいね、前島さん。いつも朋が迷惑かけて・・・」

「いえ、こちらを取材させてもらっている立場ですから。気にしないで下さい」

迷惑をかけたと頭を下げる樫出中尉。そんなことはない、こちらも頭を下げる。

その際に、図らずしも樫出中尉の豊かな頂きが目に入る。

痩せ型で、どこか悪餓鬼を連想させる穴吹中尉とは違い、樫出中尉は実に女性らしく柔らかなプロポーションを誇っている。その上、相手の服装は強化装備。さらに寒くはないのか、上に羽織るジャケットも着ていない。

薄いラバーと少しのプロテクターだけを身に纏った樫出中尉の姿は、

実に扇情的なものだった。

「そう言ってもらえると助かります。私達も行きましょっか」

榎出中尉の強化装備姿を見たのは初めてではなかったが、さすがにこんな近くで見たことはない。

脳裏に、本土に残してきた恋人の顔が浮ぶが男の本能には逆らえない。思わず凝視してしまう。

「・・・前島さん？」

美人の衛士（男含む）にパパラッチが付く意味が、今なら理解できる。

強化装備は見方によって水着より、そそられる格好なのかもしれない。

「前島さん！」

「ッ！すいません、榎出中尉。何でもありません」

急に声を大きくした榎出中尉の声に、我に変える。

子供でもあるまいし・・・女の胸に見とれてしまうとはなさけない。榎出中尉は、まだ不思議そうな顔をしていたが、どうやらバレてはいないようだった。

内心、ホッと胸を撫で下ろす正樹。しかし、彼は安堵するのが早すぎた。

正樹は、忘れていたのだ。もう一人の存在に・・・。

「違うよ、悠。前島はアンタの胸に見とれて呆けてたんだ」

誤魔化すように、檜出中尉に行きましようかと促したその時、自分の後ろから悪魔が囁く。

「えッ！」 「なッ！」

驚いた事情は異なるが、声を上げる悠と正樹の二人。慌てて振り返った正樹の背後には、先に行ったはずの穴吹朋が立っていた。

「そんなに恥ずかしかることないじゃない。今さら強化装備に文句言うルーキーでもないでしょ。」

前島。悠の胸は高いぞ。タバコ一本じゃあ済まないわよ。」

胸を両手で隠して顔を朱に染める悠と、顔を青ざめさせ硬直する正樹を見て笑う朋。

その顔は、獲物を甚振る猫のようにとてもうれしそうだった。

「今日は旨いモノが食べたいな。丁度、明日は非番だし酒も飲める。あつ前島、店の予約はこっちで取っておこうか？」

硬直する正樹の腕に、素早く自分の腕を絡ませる朋。

戦闘でも私生活でも先手必勝。穴吹朋の信条は、相手が混乱から立ち直る前に勝負を決める。

「そ・そんな・・・」

「憲兵隊にセクハラで訴えるぞ！」

「はい。奢らせていただきます。」

一応、正樹も抗議の声を上げては見るものの、朋の言葉に肯くしかなかった。

「良かったな。悠。あんたのその無駄に大きい胸もたまには役に立つんだね。」

前島がメシ奢ってくれろってさ」

正樹が肯いた途端、絡めていた自分の腕を放し、朋は悠の方に移動する。

そして、うれしそうに、まだ顔を朱に染めたままの彼女の肩をバンバンと叩いた。

一人盛り上がる朋。その傍らで、正樹は項垂れながら財布の心配するのだった。

八つとせ

やはり 人の子 争えぬ

故郷の空が いざ恋しい

そいつは剛毅だね そいつは剛毅だね

その夜、日本人料理店「サクラ」

ここ満州里には、日本帝国軍だけではなく中国軍やロシア軍、米軍など様々な国の軍隊が駐留している。

疎開を進めたい中国政府の思案とは裏腹に、街は戦場特需に沸いていた。

目ざとい商売人達が多く集まり、軍隊相手に物資を売りさばく。

そして、満州でも僻地である満州里に、色街や歓楽街が出来るのも時間はかからなかった。

軍人といえど人間。ストレスのはけ口を作ってやらないと戦えない。特に戦死率の異常に高い対BETA戦闘では、死ぬ前にと、一瞬の快楽を求めて多くの軍人達が夜の街に繰り出していった。

ここ日本人料理店「サクラ」もそういった軍人目当てに、本土から出てきた日本人が経営する店の一つだった。

少し値は張るが、材料に天然モノを使うことから人気が高い。

「やっぱり飲むならここよね。合成モノしか出さないロシア人はともかく、中国人とこなんて入ったら何喰わされるか分からないし、アメ公のところは、ジャンクばかりだしね」

本土を失ったソ連に、飲食店で天然モノを出す余力はない。

中国はソ連よりはマシとはいえ、BETAにより汚染された川から獲った魚も、天然モノとして出したりする。

安全で旨いもの食べるなら、米軍基地内のレストランか、日本人料理店が一番信用できた。

ビールの大ジョッキを抱え、上機嫌で穴吹中尉が言う。

その横では、櫛出中尉がコップ酒をチビチビとやっている。

「そりゃ〜旨いでしょう。ネタは天然。しかもそれが奢りともなればね……」

溜息をつきながら正樹は、魚肉ソーセージを口に運ぶ。不味くはないが、その横で刺身やら焼き鳥やらをバクバクやられては虚しくもなる。

「前島さんもどうぞ。これ美味しいですよ」

「すみません。ありがとうございます」

見兼ねたのか、樫出中尉がイカ刺しを取り分けてくれる。

刺身をはじめとする生物は、天然モノでないと食べることができない。

このイカも、帝国からの空輸品なのだろう。ほのかなイカの甘みが口に広がる。

「いえ、お支払いは前島さんなので。食べないと損ですよ」

訂正。急にイカの味が、淡泊でパサパサしたものに変わる。

天然モノではなく、よく出来た合成モノかもしれない。

顔を顰めた正樹を見て、ニコニコと笑う樫出中尉。

いつもは優しい彼女も、昼間のことを根に持っているのかもしれない。

改めて「スイマセン」と謝るが、彼女は「気にしてませんから」と笑っただけだった。

「……なんか、悠と前島っていい感じだね……」

「そんなことないですよ。俺、本土に待っている人がいるんで」

テーブルに顎を寄せ、アルコールで顔を赤らめた穴吹中尉が絡んでくるが、その言葉を否定する。

本土に恋人を待たせている身としては、脅されたとはいえ女の子を二人も侍らせて飲んでいるという状態は、あまりよろしくない。

「これは、樫出中尉へのお詫びと取材です。下心なんてありませんよ。」

それより今日、戦闘があつたのでしょうか？その辺りの話聞かせてくださいよ」

空になつた穴吹中尉の為に、新たなビールを注文してやる。

「せっかく楽しく飲んでいるのに、前島は戦場の話なんて聞きたいわけ？36mm浴びた戦車級なんて肉片と体液ブチまけ・・・」

「止めてよ！朋ちゃん。せっかくの料理が不味くなるでしょ」

ダンツという音とともに、コップを机に叩きつける樫出中尉。

彼女の皿には、レバ刺しが盛られていた。

「ゴメンね〜悠。あつ、それ食べないなら私に頂戴！」

樫出中尉が箸を止めたのを見計らい、皿ごとレバ刺しを奪い取る穴吹中尉。

もしかしたら確信犯だったのかもしれない。しかし、残念なことに今日の支払いは、正樹持ち。

料理を奪い取られた樫出中尉は、一瞬悲しそうな表情を浮かべた後、

「すみません！レバ刺し 1人前追加お願いします。」

とあっさり追加注文で問題を解決してしまった。

女性といっても、相手は現役衛士。その旺盛な食欲を持って正樹の財布に襲い掛かる。

「はあくもう好きにしてください。穴吹中尉も、そんなマクロなことではなく、もっと大きなことを教えてくださいよ。」

二人の戦果自慢なら、こうして並んで杯を交わす必要はない」

追加注文に溜息をつきながら、穴吹に迫る正樹。

穴吹と檜出は、ここ満州里でも指折りのエースだ。二人の上げている輝かしい戦果は、知りたくなくても軍の広報が教えてくれる。

正樹の知りたいのは、そんなことではない。

真実に迫りたい。報道管制の奥に隠されたBETA戦の真実に。

国民の多くは、BETAの姿形さえ知らないのだ。正樹も、ここ満州に来るまで知らなかった。

世界規模の危機が叫ばれながらも、軍や政府上層部が隠すBETAというものを暴き、国民に知らせる。

ジャーナリストとしてこれ以上の仕事はない。

「戦況は最悪よ。後、一ヶ月も持てば良い方じゃないかな」

店の喧騒の中でも、朋の呟きははっきりと正樹に聞こえた。

軍の広報は、そんなことは言っていない。いつも負ける負けると言っている朋でさえ、ここまではっきり言うことはなかった。

「また冗談を……。今日の穴吹中尉は、いつも以上に毒舌ですね」
「冗談ではないですよ。前島さん。満州は遠からず陥落します。貴方もそろそろ本土に帰った方がいいわ。
もし、防衛線が破れれば軍の移動が最優先される。非戦闘員を助ける余裕は、どこにもない。」

朋がいつも言う冗談だろうと誤魔化そうとした正樹の言葉を悠が否定する。

驚いて、悠の顔を見る正樹。朋の口からならともかく、真面目な悠さえもが負けると言っている。

不良軍人である朋とは違い、気さくで優しいながらも、きっちりと一線を引いていた悠。そんな彼女が戦況を隠しもしない。

「まもなく民間人には退避命令が下されると思うけど……。BETAの動きは読めないからね。今のうちに、とっとと逃げちゃいなよ」

「いや……。しかし、それじゃあ……」

朋や悠の言葉に愕然とする正樹。

自分の知らない所で、ここまで戦況が悪化していたのか……。

兆候はあった。基地に顔を見せる度に見知った顔が消えていた。

満州に来た当初は、知った者が消えれば、変わりの者が部隊に補充され、新しい出会いがあった。しかし、今ではそれも少ない。

考えられる原因は補充が滞っているのか、それとも補充されても自分が出会う前に戦場に消えているかしかない。

それなのに、現実を見るために最前線に出てきたはずが、戦場の空気に感覚が麻痺して現実が見えてなかった。

衛士や兵士が死んでいくのが当たり前になり、大事なことを見落としていた。

様々な問題を抱えながらも、今まで維持されてきた満州防衛線。いつの間にか、それが自分の中で当たり前となっていた。

「ここで最後まで踏ん張るなんて言わないでよね」

黙った正樹の顔を覗き込むようにして朋が言う。

「私の俸給の内には、国民を守ることも含まれているんだ。余計な仕事を増やさないでよね」

「知り合いが死ぬのは嫌ですから・・・」

朋と悠が笑いながら言う。しかし、それはどこか寂しげな笑みだった。

「俺がここに残るのは、二人にとって迷惑ですか？」

「うん。迷惑」

はつきりとした言葉で応える朋。

悠も口には出さないが、静かに肯く。

「ここでアンタが見たことを本土の連中に伝えてよ。それがアンタの仕事。あっ、これ遺言じゃないからね。私はまだ死ぬ気ないから悠の胸代もこれぐらいじゃあ足りないし・・・今度は本土で奢ってよ」

朋の言葉に正樹は、すぐに答えることが出来なかった。

何を言っているのか分からなかったのだ。

「ひつとつ、とせ〜……………」

そんな時だった。沈黙を破るように突如、店に響く下手糞な合唱。歌声のする方を見ると、10人ぐらいの少年達が肩を組み歌っている。

全員が一目で少年と分かる姿たち。服装はバラバラなのに、なぜか全員が戦車帽を被っていた。

店内で歌い騒ぐという迷惑きわまりない行為なのに、店の主人は何も言わない。

「機甲生徒ですよ。前島さん」

分からぬ前島の為に、榎出中尉が説明してくれる。

機甲生徒とは、陸軍幼年学校から戦車部隊に進んだ者たちのことだった。

12歳から陸軍に入り、2年間の教育を経て部隊へと送られる。

部隊での練成期間を考えれば、目の前で歌っている少年達は15〜16歳ということになる。

「最近、教育機関を短縮しているらしいよ。あれ、いつだった？徴兵年齢の引き下げが野党の反対で否決されたでしょう。」

その代わりに、幼年学校の枠を拡充して、兵士の促成栽培してるのよ」

悠の言葉を引き継いで説明する朋。

「前島、アンタ運がいいよ。これがアンタの知りたかった最前線、帝国の暗部だよ。」

共産圏だけじゃあない。帝国だって子供を戦場に放り込んでいる。誰も知らない内にね……」

話す朋の表情は、汚らわしいモノでも見るように険しかった。1980年に徴兵制度が復活した日本帝国。

その対象年齢も月日が経つことに下げ続けられている。だが16歳、高校生の徴兵はまだ行われていない。

しかし、正樹の前には、戦う子供の姿がある。

知らず知らずの内に、手がカメラへと伸びていた。

レンズの向こう、何かに怯えるように酒に酔い、熱狂的に歌う子供達の姿。

それは、BETAの侵略によって滅びを迎えつつある人類の縮図のようにも見えた。

終わりとせ

終わりの時には、車中にて

死して 御国の盾とならん

そいつは剛毅だね そいつは剛毅だね

最後の時まで持ち場を守り、祖国を守るといふ決意を秘めた歌。

店内に、勇壮な少年戦車兵達の歌声が響き渡る。

「畜生。なんて歌なんだ・・・」

明るいのに暗い。勇壮なのに重苦しい。

正樹には、少年達の歌声が葬送曲のように思えてならなかった。

THIRD DAY

「桃姫、跳躍ユニットの調子がおかしい」

その声に朋は頭部カメラを背後に向ける。網膜投影装置に映し出される機体背後の映像。

そこには片方の跳躍ユニットから黒煙を上げる僚機の姿があった。

BETAの数が増えるのを抑える為に、戦隊に所属する戦術機は天候さえ良ければ毎日のように出撃していた。

平時では考えられない連続した機体酷使に整備が追いついてない。通常なら交換されるべき部品を変えずに出撃している機体も多かった。

衛士が前線で消耗するように、整備兵もまた絶え間ない戦闘で疲労し消耗していく。

交換部品は底をつき、共食い整備は当たり前。

多少のことには目を瞑り、騙し騙し機体を運用しているのが満州に展開する日本帝国軍の実情だった。

自分の後ろを匍匐飛行で飛ぶ僚機の故障も、無理な運用のつけが回ってきただけ。

戦闘中でなかったことを神に感謝するしかない。

「桃姫、了解。屠竜はそのまま基地に引き返せ。私はこのまま哨戒を続行する」

「桃姫、単機での哨戒は危険性が高い。一緒に帰ろう」

目に映し出された櫛出悠の姿を見ながら指示を出す穴吹朋。

しかし、悠は朋の出した単機での行動に反対する。ただでさえ薄い戦力を広く分散して運用しているのだ。

単機で行動中に何かあつては、助かるものも助からない。

「屠竜、単機哨戒も最近じゃあたり前のことですよ」

「で、でも！」

朋の言うように、哨戒ラインの長さは変わらず可動機だけが減っていく現在、たしかに単機での哨戒も行われていた。

だが、それは比較的に安全性の高い方面に限ったこと。

今から自分達が向かおうとしているポイントは前線に近く、資源搾取や群れから逸れたBETAが多く見られる危険の高い場所だった。

「心配いらないよ。必ず帰る」

まだ何か言うおつとしていた悠を振り払うように一方的に無線を切る朋。

悠には加速していく朋の撃震の後ろ姿を見送ることしか出来なかった。

「……朋ちゃん……絶対に帰ってきてよ」

息つき始めた跳躍ユニットを切り、機体を基地への帰還針路に向け

ながら悠は呟いた。
朋は信頼できる相棒だ。なのに、今日は胸騒ぎがする。

「桃姫」帰還せず。

その日、悠の思いとは裏腹に、朋の操る撃震は基地に帰らなかった。

M u v - L u v O l d S o l d i e r s

〈第3話〉

1995年 満州国境

そこは白に支配された世界だった。

雪に覆われた大地。身に纏う装備は銃に至るまで白の覆いを被せられている。

そして、吐き出される吐息は、白い蒸気となって宙へと消えていく。テントと雪をつかって作られた雪濠の中、自分は苛烈な訓練のお陰、もう一人は強化装備のお陰でなんとか生きていた。風にあおられたテントの隙間から覗く外は白一色。轟々と音を立て雪が舞っていた。出撃前、気象予測を行った幹部の顔を思い出し、日本帝国陸軍長距離偵察隊所属・志賀智治軍曹は舌打ちした。

跳躍ユニットの不調で墜落した戦術機の衛士を救出する為に出撃した志賀達のチーム。それは簡単な任務のはずだった。

随伴する護衛の戦術機こそいなかったが、彼らの乗るUH-60Jは全天候での作戦能力を持ち、たとえサバイバー（救助対象者）の居る場所が、逸れBETAと遭遇する危険性が高い前線近くでも目的は救助。掃討ではない。

落ちた激震の残骸を発見し、ラペリング降下。

目標の衛士を発見した時、任務の成功を確信した志賀の脳裏には、PXで一杯やることしかなかった。

それが狭く寒い雪濠の中、二人で震えながら天候の回復を待っている。

自分が降りたのを見計らったように急変した天候。

サバイバーの吊り上げが不可能となってしまうへりは帰還。

残された志賀はサバイバーと共にビバークを余儀なくされ、天候回復を待つこととなった。

もう5分だけ天候が持ってくれば今頃・・・志賀は、自分の不運

を恨みながら溜息をついた。

「み・ミイラ取りがミイラになってどうすんのよ……」

隣で震える女が文句を言う。彼女の名は「穴吹朋」

満州里に展開する陸軍第50戦術機戦隊所属の衛士だった。

出撃前に受けた説明では、かなりの腕利きらしい。

だが……朋の姿を見ながら志賀は顔を顰めた。

レスキューシートと毛布に包まり、ガタガタと震えている情けない姿。

その有様は、とても熟練衛士には見えない。彼女の面立ちもまたそれに拍車をかける。

肩口で無造作に切られた髪。

美しいというよりは少年のような童顔。

強化装備を着ていなければそこらにいる学生と間違っってしまうそうだった。

「俺が降下できただけでも良かったと思ってください。こうやって防寒装備も持ってくれた。

天候の回復を待って迎えのヘリが来ます。それまでの辛抱ですよ」

志賀は朋に携帯ガスコンロで沸かしたコーヒーを渡しながら応えた。手渡されたマグカップをひったくるようにして受け取った朋は、寒さでかじかんだ手を少しでも温めるように抱きかかえるようにして持つ。

コップから立ち上る暖かな湯気と、コーヒーの香りが少し心を落ち着けてくれる。

「合成ではなく本物ですよ。どこのものかは分かりませんがね」

「何よ、それ。意味が分からないわ」

適度の緊張は必要だが、余計な不安は体力の消耗を招く。

不安を解そうとしてくれたのか、志賀の言う下手なジョークに文句を言う朋。

産地が分からないのに、なぜ本物と分かるのか？

今どきの合成モノは着色料と香料料、化学薬品の力を借りて本物に近い味を持っている。

コーヒー愛好者ならともかく、合成モノの何十倍もする本物を買う意味はない。

本物と話した志賀もそうだろう。愛好者が産地も分からず本物などと言う訳がない。

このコーヒーも十中八九、合成モノだろう。

「今どき本物なんて手に入る訳がないでしょ。嘘をつくなら産地ぐらい調べてきなさい。手抜きは駄目よ」

「……それだけの元気があれば十分です。夜が明ければ天候も回復するかもしれません。もう少しの辛抱です。頑張ってください」

朋の言葉に笑みを浮かべながら答える志賀。

しかし、笑みとは裏腹にその目は観察するように、じっと朋の様子を見ていた。

「……試したの？」

志賀の視線に何か含むものを感じた朋は、不満げな声を上げる。

「極限状態に置かれた人間はパニックになるか、自分の殻に閉じこもり無反応になるかのどちらかです。中尉は少し寒さに弱いようなので試させてもらいました。ちなみにコーヒーは本当に本物ですよ。マンデリン、インドネシア産です」

俸給のほとんどがコイツに消えているんです、と自慢げにマグカップを揺らしながら応える志賀。

朋の予想に反して、志賀の炒れたコーヒーは本物だった。

極限状態になった人間は、パニックから思考力が乏しく低下する。攻撃的になったり、自分の殻に閉じこもり反応しなくなってしまうたりするのだ。

志賀は、朋との会話の中に彼女の様子を図っていた。

「・・・むかつく」

志賀の言葉に、朋はプイツとそっぽを向く。

貴重な本物のコーヒーを飲めたのは幸運だが、あいにく自分は細かい味が分かるほどコーヒーに精通している訳ではない。

それよりも試されたという方が我慢ならなかった。

志賀にとって、自分はそこまで弱く見えたのか・・・

「お気を悪くされたなら謝ります。穴吹中尉。これも自分の仕事なので許してください。自分にとっては、階級はどうあれ遭難者は遭難者なので・・・」

空気が変わったのを感じた志賀が「将官相手でも態度は変えませんが」と付け加えながら朋の機嫌を取ろうとする。しかし、朋は横を向いたまま応えようとしない。

宥める志賀と無視を決め込む朋。

その姿は、気まぐれな飼い猫を必死であやす飼い主のようでもあった。

「アンタ・・・歳は？」

「はっ？」

気を使う志賀に煩わしげに応える朋。

「20ですが・・・」

「私は25よ。アンタより年上」

ついには頭から毛布を被った朋が、顔だけ出してボソリと言う。自分の方が年上だと主張し黙り込む朋。志賀も朋の言いたいことが分からず黙るしかなかった。

会話がなくなり黙り込む二人。

雪濛の中は、風雪の音が響く外とは裏腹に重苦しい沈黙がおりていた。

「そんなに弱く見えた？」

往く時流れただろうか・・・再び、朋が口を開く。

志賀は朋の方を見た。彼女は相変わらず毛布を頭から被り、緑色の毛布の中から横顔だけが覗いていた。

膝の上に顎を寄せ、その目は何も無い闇を見つめている。

「ねえ、そんなに弱く見えた？」

答えねずにいると朋は、また同じ言葉を繰り返して問うてきた。

その声は先ほどまでの勝気な雰囲気とは違い、暗く沈んだものだった。

「穴吹中尉。先ほども言ったとおり自分は・・・」

「今回も上手くいくと思っていた。単機行動なんてなんでもない。

突撃するしか頭のないBETAなんていくら掛かってこうようが怖くもなんともなかったんだ・・・」

応えようとした志賀だったが、喋り始めた朋をみて黙り込む。

「悠を先に帰して、すぐに小規模のBETA群を見つけた。すぐに蜂の巣にしてやったよ」

朋は口で、バーンと下手な砲撃音を真似て力なく笑った

「全て殺した。殺したはずだったんだ。レーダーもセンサーも何も反応がなかったのに・・・」

その時、志賀は朋の肩が震えているのに気付いた。

「穴吹中尉・・・」

「雪の中から戦車級が突然飛び出してきた。あっという間に取り付かれこの有様。」

私もヤキが回ったのかな。振動センサーを鵜呑みにして戦場で棒立ち。これで撃墜王だからね・・・ホント自分が嫌になる」

「うわっ」

急な出来事に声を上げる志賀。

バサリという毛布が落ちる音がしたと思った瞬間、彼は朋に抱きつかれていた。

「怖いんだ・・・戦車級の装甲を齧る音が・・・ガリガリって・・・無線越しの音なんかじゃない。」

すぐ傍で・・・今まで気になんてならなかったのに・・・」

抱きついてきた朋は、ガタガタと震えていた。

志賀はそんな朋の肩をそっと抱きしめる。

「中尉・・・大丈夫です。すぐに帰れますよ。安心して下さい。」

「帰っても・・・帰っても、また出撃じゃないか！」

キッと志賀を睨みつける朋。

帰ったらすぐに出撃しなくてはならない。

強化装備についているレコーダーには衛士の健康状態も記憶されている。

異常がなければ、帰ったその日にも出撃ローテに組み込まれるだろ

う。

衛士も機体も何もかもが足りないのだ。五体満足な衛士を休ませる余裕などない。

「一体いつになったらこの戦いは終るのよ？殺した！殺した！殺したんだ！

それなのに次の日には何もなかったように湧き出てくる。何なのよ・・・あいつら」

志賀に抱かれた腕の中、朋は叫んだ。BETAが怖かった。怖くて怖くて溜まらなかった。

外に無防備な状態でいるということもそれに拍車を掛けていた。

風の音がBETAの立てる足音のようにも聞こえる。闇の向こうに奴らの影がチラつくのだ。

剥がれ落ちた撃墜王の仮面。世の中を斜めに見ることによって現実から逃げていた。

達観という名の諦め。自分の死さえもどこか他人事のように捉えていた。

戦闘の中心にいながら、意識は何所か別のところに置く。

それが穴吹朋の強さだったのだ。

戦闘を客観的に見ることが出来れば高揚も恐怖もない。常に冷静な自分でいられる。

しかし・・・

「無理よ・・・もう無理。もう戦えない・・・」

撃墜王という夢から覚めた女に戦う術はない。知ってしまった恐怖。

恐怖は判断を狂わせ、萎縮した体は戦術機を兵器からBETAの餌へとかえる。

体の震えが止まらなかった。悠には悪いが基地に帰りたくない。

このまま電源を切るように、全てが終わればどんなに良い事か……。現実から逃げるように朋は志賀の胸に頬を寄せた。

そんな朋の頭に、手が載せられる。

見上げた視線のすぐ先に、難しい顔をした志賀の顔があった。

朋は、自分の体を抱く志賀の手に力が入るのを感じた。

「ねえ……あなた待っている人はいるの？」

朋は志賀の背に腕を回しながら言った。

誘うように頬を志賀の胸に擦り付ける。

全てを忘れたい。例えそれが一瞬でも……。だが、そんな朋の願いは叶わなかった。

朋の誘いに抗うようにスツと体を離す志賀。

「なんで……」

「すみません。中尉。貴方は今、冷静じゃない」

さすがのように志賀を見上げる朋。だが志賀は、ゆっくりと首を横に振る。

そんな志賀を、朋は悲しげな目で見上げた。

「冷静かなんて関係ないよ。あなたも今どき童貞って訳じゃないでしょ。遊女を抱くように何も考えずに抱いてよ」

身を包んでいた毛布が滑り落ちる。温調が効いているはずの強化装備。

しかし、痛さにも似た寒さが身を包む。体がぶるりと自然に震えるのが分かった。

「抱いてよ・・・ねえ・・・忘れさせてよ・・・」

グローブに包まれた自分の手が鍛え上げられた胸板を、志賀の胸の上を擦るように這い回る。BETAへの恐怖。このまま拒絶されたら・・・

「逆ですよ。中尉。今、自分がここで貴方を抱けば、中尉は戦えなくなる」

自分の心を読んだように言う志賀の言葉に顔を上げる朋。

志賀の胸を這い回っていた手は、彼に握り締められ動きを止める。

「帰ってからも必要であるなら・・・でも、今は駄目です。利用はしても逃げちゃ駄目なんです」

諭すように言う志賀。戦場は容易に心を破壊する。

酒に女、時には薬まで。心に平穏を得る為、追い詰められた人間は何かにする。

しかし、利用するつもりが溺れ潰れる者も数多く出ているのも現実だった。

身も心もボロボロになって壊れていく兵士達。

「自分の足で立ち上がってください」

心理療法などと言っても、結局は自らで解決するより方法はない。環境を変えることが出来ないなら尚更だった。

志賀の言葉に俯く朋。体から落ちた毛布をズルズルと引っ張り、また頭から被る。

「アンタ・・・童貞でしょ・・・」

はあくど大きな溜息を吐きながら言う朋。

「はっ?」

「変に理屈っぽくてチャンスを無駄にする。雰囲気も読めない」

朋の声は先ほどまでの暗く沈んだものよりは幾分マシなものだった。毛布からチラチラと志賀の方を窺う。そんな朋に、志賀は笑顔を浮かべた。

「バレました?」

「バレバレよ。馬鹿・・・」

顔を赤らめる志賀に、硬いながらも笑顔を返す朋。

「もう抱けなんて言わないから・・・ちょっと肩貸してよ」

志賀にもたれ掛るようにして、体を預ける朋。

満州の夜下、寒さと恐怖で凍った心身を溶かすように・・・雪濤の中、身を寄せ合う朋と志賀。二人の夜はゆっくりと過ぎていった。

「これぐらいなら大丈夫ですよ」

翌朝、空はまだ曇っていた。

89式カービンを手に、隣に立つ志賀が口を開く。

「分かっているわよ。そんなこと！」

まだ不安な顔をしていたのだろうか・・・志賀の顔をジト目で見る
朋。

雪濠で過ごした一夜。朋も随分と本来の調子を取り戻していた。
結局、二人交わることはなかったが、隣に志賀がいてたことは、朋
にとって大きな救いだった。

落ちた屋根に再び上る為、梯子が必要なように・・・
何もしなくても隣に誰かいるだけで助けとなることはある。

「ぶっ・・・ふふふ」

・・・朋ちゃん！・・・なぜか脳裏に怒った悠の顔が思い出され、
噴出してしまう朋。

脳裏に浮んだ世話焼きな相棒の顔。自分がどれだけ甘えていたか・・・
・今ならよく分かる。

加藤少佐や悠、第51戦隊の仲間達。そして今回、救助に来てくれ
た志賀。

みんながいたから今まで戦えた。なぜか顔が熱を持つ。帰ったら心
配かけたと謝ろう。

戦況の悪化から満州里の歓楽街はドンドンと縮小されているが、まだ商魂逞しい（無謀な）店が何件かは残っている。心配かけた悠と、久しぶりに加藤少佐も誘ってもいい。朋は顔をニヤかせながら思いを巡らした。

「穴吹中尉、そろそろヘリが来ますよ」

空を見上げながら、志賀が声を掛けてくる。

・・・そういえば・・・こいつにも礼をしなくてはならない。

志賀の横顔をジッと見る朋。そして、良いことを思いついたと笑みを浮かべる。

網膜投射装置をそつと外して、大地に落とす。

「志賀軍曹！」

大きな声を上げる朋。

「はい！？」

突然、隣で大声を上げた朋に驚く志賀。

その一瞬の間、志賀の首に手を巻きつける朋。そのまま、しっかりと頭を押さえ込む。

「んんん」

志賀が反応する前に、その唇に自分のものを重ねる。軽い奴で許してなんかやらない。

突然の口づけに混乱した童貞君が立ち直る前に、口内に舌を突っ込

み隅々まで蹂躪してやる。

獣が獲物を貪るような濃厚な口づけ。

それは我に返った志賀が、朋を突き飛ばすまで続けられた。

FOURTH DAY

「・・・おかしい」

悠はいつものように達磨ストーブの傍で、寒そうに手を擦りあわす朋の姿を見て呟いた。

外は大雪。即時待機任務を終え、朋と一緒に吹雪かれながらアラートハンガーから帰ってきた。

ここまでは同じ。

しかし、そこからがいつもと違う。

いつもなら衛士待機所のドアをぶち破りそうな勢いでストーブに猛進する朋。

体についた雪なんて二の次。

解けた雪で待機所の中に水溜りが出来ようがお構いなしだった。

何度、悠が文句を言っても改めようとしなかったあの朋が、戸口で羽織っていたジャケットを脱ぎ、きちんと雪を落としている。

その上、ブーツに挟まった雪も丁寧に掻き落とし、最後に髪をかき上げるようにして、頭についた雪（滴）を払いながらストーブへと向かう。

朋の体についた雪は綺麗に落とされ、いつもストーブの周りにできる水溜りがない。

「・・・おかしい」

再び呟く悠。どういう心境の変化だろう。

あれほど注意しても言うことを聞かなかった朋が、自ら雪を落としストーブにあたっている。

寒さに弱い（我侷な）朋が雪を落としてから、ストーブにあたるのは、ここ満州里に部隊が布陣してから初めてのことだった。相棒の意外な行動の変化に首を捻る悠。

「・・・何？悠もそんなところにいつまでも立っていないで火にあたりなさいよ。」

そんな悠の視線を感じたのか、朋が顔だけ回して向かって呼んでくる。

「ううん。何でもないよ」

朋の声に、慌てて自分の体についた雪を払い、戸口からストーブの方に移動する悠。慌てる悠の姿を朋は怪訝そうな顔で見えていたが、すぐにストーブに向き直り、暖炉の傍に置かれたバケツからコークスをスコップですくい、ストーブの中に放り込む。

そして、いつものように「寒い、寒い」とブツブツ文句を言いながら体を丸め込む朋。

やっぱり気のせいかな・・・。

猫饅頭ならぬ朋饅頭、ストーブの傍で気持ちよさそうに丸まっている相棒の姿を見て、悠は頭をふった。

人間そう簡単には変わらない。ただでさえ戦場は人の本質をむき出しにする。

朋が雪を払って、ストーブに当たっているのも多分、今日だけの彼女の気まぐれ。

チラリと朋の様子を窺う悠。悩む彼女の傍ら、朋はウトウトと舟までこぎ始めていた。寝ぼけた朋が誤ってストーブに倒れこみ、火傷しないようにと注意する悠。

与えられた一時の休息。

シューシューとストーブに掛けられたヤカンの音だけが、静かに待機所に流れていく。

「朋ちゃん。やれば出来るんだから、次も雪落としてよ」

悠は我俣な相棒を起こさぬように、そつと声をかけた。

M u v - L u v O l d S o l d i e r s

〈第4話〉

1995年 満州里 第51戦術機甲戦隊

「やっぱりおかしい！」

部屋に響く悠の声。

叫ぶと同時に振り下ろされた右腕が、膝の上に置かれた海豚型抱き枕を捉える。

殴られた海豚はムギユと抗議の声を上げ、柔らかな胴体をくの字に曲げた。

「・・・男ですかね」x2

揃った声で悠に答えるのは、篠原弘子と美智子。

二人は、全帝国軍の中でも珍しい双子の衛士だった。

「何か掴んでいるの？」

「さあどうでしょうか・・・」

ギリリと音がでそうな鋭い目つきで篠原姉妹の方を見る悠。

弘子と美智子、二人とも「しまった」という顔を浮かべて慌ててソッポを向く。

悪化した天候に、第51戦術機甲戦隊に所属する衛士達は久しぶりの休息時間を得ていた。疲労の溜まった衛士達はこれ幸いと惰眠を貪り、整備班は連続した出撃で衛士以上に疲労困憊の機体に取り付き可能な限りの修復が行っていた。

悠や朋、篠原姉妹は同じ部屋（女性衛士は営舎の関係から士官でも4人部屋だった）の者同士で連れ添って朝食を取り、司令部に出頭。その後、4人は軽いミーティングを済ませた後に開放され、休息を命じられたのだった。

一日に3度の出撃。過酷極まりない戦闘を半月あまり続けた悠達にとって、加藤少佐の休息命令は神の福音にも等しい。

司令部から営舎、そのまま浴場へと突入し日頃、シャワールームで済ましていた鬱憤を晴らすように疲れきった肌をケアしてやる。そして、スッキリした後にはやることといえば一つしかない。

悠と篠原姉妹は、浴場から帰ると各自のロッカーに貯蔵されている缶詰や酒を部屋の中央に置かれた机の上に並べ、衛士間の意思疎通の強化という名目の下、昼間から飲んでいたのであった。

久しぶりの命の洗濯に、いつもより羽目が外れ気味だった3人。彼女達が朋のいないことに気付いた時には、机の上には空になった一升瓶が転がっていた。

休みの日は、部屋のみんなで飲むのが習慣だった。

いつ死ぬかも分からぬ過酷な戦場。アルコールで鬱な気分を吹っ飛ばし、後は泥のように眠る。

余計なこと考えないことが、戦場で長く生きる秘訣だ。

朋もこの部屋飲み会を好み、出撃など任務でどうしても出られない時以外は、自ら進んで出席していた。その朋が姿をくらしめない。

「最近コソコソしていると思ったら・・・知っていることを全部話さない」

自分の知らない何かがある。

弘子と美智子の態度に感じるものがあつた悠は二人に詰め寄つた。

「何も知りません。知っていても言えませぬ」

「知りません！知りません！お姉ちゃんに聞いてください！」

白磁の肌を朱に染めてにじり寄ってくる悠に、後退りながら答える弘子と美智子。

美智子に至つては、さりげなく姉である弘子を盾にする始末だつた。

「私も鬼じゃないのよ。今、言えば何もしないわ・・・」

手をワキワキと動かしながら迫る悠。その顔には黒い微笑が浮んでいた。

「・・・え、衛士の流儀に賭けて、個人の秘密は守られるべきかと思ひます」

逃げるといつてもさほど広くない居室。

壁際に追い詰められた弘子は、暗黒面に堕ちた酔つ払いに必死に抗議する。

彼女の背に隠れた美智子もその通りだと、激しく頭を上下させる。

しかし・・・

「背中を預ける相棒のことを知ることは僚機として最低限の義務だ
と思うのよね・・・」

壁際に座り込む弘子の頬を撫でながら囁く悠。
弘子の頬を撫でる細く長い指が怪しく這い回る。

「さ・最低限のプライパシーは守られるべきではないでしょうか！
？」

ゾワリと背中に湧き上がる恐怖に、必死に立ち向かいながら抗議す
る弘子。

自分の後ろに隠れる妹の震えが、背中伝いに伝わってくる。

(美智子・・・お・お姉ちゃん、頑張るからね！)

襲いくる白磁の酔っ払いから妹を守る為にも、自分が何とかしなく
てはならない。自ら奮い立たせる弘子。

だが、彼女の決意は長く続くことはなかった。

「朋さんにも秘密の一つや二つ・・・ヒッ」

恐怖の声を上げる弘子。

彼女の視線の先には鬼がいた。

「弘子・・・私、分らず屋さんは嫌いなの・・・」

地の底から響いてくるような暗い声が弘子の耳朶を打つ。

弘子は、自分の頬を撫でる悠の手に力が込められていくを感じた。

酒宴はサバトへ・・・

それは、篠原姉妹にとって地獄の始まりだった・・・。

悠と篠原姉妹の宴が第二幕に移った頃、朋は格納庫にいた。

指示を飛ばす指揮官の声にクレーンの作動音、重量物を吊り上げていることを示す警報機の音などが入り混じった格納庫は喧騒に満ちていた。

外装パーツを外された戦術機に群がる整備員の姿。PCや工具を持った者達が忙しそうに、戦術機の足元を走り回る。

整備というプロ達が戦う戦場。

自分の戦う戦場とは大きく様相が異なるが、たしかにここはプロの集団が己の責務の完遂を目指して戦う戦場だった。

その中、朋は整備員の邪魔にならぬよう格納庫の壁に寄り掛かり、自分の乗機を見つめていた。

出撃を繰り返した機体、特にBETAとの戦闘を経験した戦術機は一目で分かる。

重金属運と硝煙の化粧、BETAの返り血で機体が斑に染まるからだ。

彼女の前に立つ機体は、跳躍ユニットのノズル周りこそ排煙で黒く汚れていたが、機体自体は綺麗なもので汚れもほとんどついていなかった。

「10863号」

朋は声に出さずに肩口に書かれた製造番号を読んだ。

10863号機。それが自分に与えられた新しい機体の名前だった。

前の二桁は製造工場を示すから光菱名古屋工場で作られた863番目の撃震となるその機体。

10863号機は満州に来て3機目の新しい機体だった。

1機目は戦車級に齧られて大破。

2機目は度重なる出撃の連続に、ガタが来てパーツ取りへと回された。

「おまえも戦いを知らぬまま逝けたら幸せなんだろうな・・・」

眼前に立つ汚れを知らぬ撃震を見ながら朋は呟いた。

兵器は戦わぬ時が一番綺麗だ。朋は新しい撃震を見ながら思った。

確かに戦場を駆け戦う兵器は人を引き付ける魅力がある。

だが、それはどこか危ういものだ。

機能美と自然界には決して存在しない作られたモノとしての違和感。そして、内封された絶大の力が人を狂わす。

魔性の美というべきか・・・。

戦う兵器は、時に狂うしいほどの美しさで人々を魅了する。

その上、戦術機は人型だ。軍事に疎い素人でも見た目で強さをイメージしやすい。

新型と比較して機体が重厚な激震の姿は、誰が見ても力強く感じる。

「抑止力……私が軍に入った時には、もうそんな言葉は消えていたけど……。戦術機の中でも、お前ほどその言葉が似合う奴はいないよ」

戦わずして戦いを収める。それが兵器として理想の姿。

重厚なフォルムを誇る撃震は、華奢な新型機よりよほど強く見える。

「お前のカツコよさをBETAが理解してくれればな」

冗談まじりに溜息をつく朋。

BETAに威圧は通用しない。感情のない相手との戦いはとても疲れる。

朋も最初は、人間相手よりはバケモノに銃を向ける方が良いと思っていた。

だが、逆にBETA戦は終わりが見えない。

そもそも感情があるかも分からず、コミュニケーションの取れぬ相手では、人類も交渉の余地がない。

機械相手に延々と戦っているような徒労感。命を懸けた独り相撲をしている気分だった。

「出来るかどうか分からないけど、前任者よりは長く使ってやるつもりだからさ……。お前も頑張ってくれよ」

整備員の波をすり抜けるようにして、自分の機体に寄った朋は、言いながら撃震の太い主脚に手を添える。物言わぬ相棒に、自分の想いを込めるように。

「じゃあね。明日から、また頼むわ。お前も刈谷大尉にすっかり見てもらうんだぞ。私も風呂は入りなおして寝るよ」

背中越しに手を振りながら格納庫を後にする朋。

その姿を10863号機は静かに見送るのだった。

「あれ・・・なんか静かだな。あいつらもう寝たのかな」

部屋のドアの前で、朋は頭を傾げた。

手には、格納庫からの帰りにPXで買ったつまみの入った袋。

いつものように部屋で飲んでいるであろう悠や篠原姉妹の為に買ったものだった。

「おゝい。もう寝ちゃったか？」

そっとドアを開ける朋。

彼女の予想通り、部屋の中央に置かれたテーブルには食べ散らかされたつまみの残骸や、空になった酒のビンが転がっていた。しかし、肝心の悠や篠原姉妹の姿が見えない。

「風呂にでも行ったのかな？んっ」

床に転がったビンを避けながら部屋に入った朋は、ガサガサと鳴る妙な音に気付いた。

音の元は部屋の右奥。弘子の使っているロッカーだった。

「何だ？わっ！」

ロッカーを開けると同時に、何か白いものが朋に覆いかぶさってくる。

それは、シートで簀巻きにされた弘子の無残な姿だった。

「ど、どうしたんだ。弘子！何があった!？」

猿轡を嵌められ、ウーウーと奇妙な声を上げる弘子。

朋は慌てて猿轡を外してやる。

「朋さん！逃げてください！悠さんが、悠さんが壊れました！」

「はっ？何を言っているんだ？」

猿轡が外されるとともに焦った声を上げる弘子。

しかし、朋には彼女が何を焦っているか分からなかった。

ワタワタと慌てる弘子とは対照的に、朋は訳が分からないと頭を傾げるばかり。

「悠の酒癖の悪さは昔からだろ……。まあ、これはさすがにやり過ぎだと思っけどね」

歴戦の衛士の勘も、オフの時には働かない。

弘子の体に巻かれたロープをほどいてやる朋。

早く逃げろという弘子の声は、彼女に届くことはなかった。

そして、軍事作戦においての初動の遅れは時として致命傷となる。

朋は基本というべきその事項を、身を持って味わうこととなった。彼女の背後で、静かに開けられるドア。その隙間から発煙筒が投げ込まれる。

救難用の位置表示用に使っものだろう。

部屋が一瞬でピンク色に染められ、朋と弘子は視界を奪われた。

「な、なんだ!？」

突如、視界を奪われ驚きの声を上げる朋。

荒々しい足音とともに誰かが部屋に入ってきて押し倒される。

「い、嫌〜」

煙の中で、弘子の悲鳴が聞こえる。侵入者の錬度は素晴らしいものだった。

あっという間に体をうつ伏せにされ、腕を拘束帯で締め付けられる。

「誰だ!おまえら!何をする!」

ジタバタと暴れるが、背中中央に寄せられた相手の膝はピクリとも動かない。

その代わりに頭上から掛けられた声は、朋のよく知る人物のものだった。

「朋ちゃん、遅かったね・・・何所に行っていたのかな〜」

「ゆ・悠!これは一体なんの真似よ。早く拘束を解きなさい!」

煙が晴れてきた部屋。

うつ伏せに拘束された朋の見上げる視線の先には、なぜか戦闘服に身を包んだ悠の姿があった。

その奥には、弘子が自分と同じように妹の美智子に拘束され、床に転がされている。

自分を押さえつける悠に抗議の声を上げる朋。

しかし、戻ってきた言葉は冷たいものだった。

「駄目だよ。朋ちゃん。相棒に隠し事する悪い子はこれからお仕置きなんだから……」

酔っ払い特有のどこかトロンとした目つきで、薄ら笑いを浮かべる悠。

退かないという意志表示のように、朋の背中を押さえつける膝に力が込められる。

「い、痛いって！訳の分からないこといってないで、とっとと……ひゃー！」

痛みから文句を言う朋。

だが、彼女は最後まで言葉を発することができなかった。

朋の頬を撫上げる悠。

その手が乱れたうなじを掠め、首元を妖しく這い回る。

「朋ちゃんは敏感だね」。もう志賀軍曹には抱いてもらったのかな」

「な、何のことよ？アンツ！」

朋の嬌声が部屋に響く。
うつ伏せから、仰向けにひっくり返される朋。

彼女に馬乗りになった悠は、嬉々とした表情で朋のフライトジャケットをただけサイズは控えめだが、形の良い朋の胸を蹂躪し始める。悠の細く長い指が優しく、時には荒々しく朋の乳房に沈み込んでいく。

悠の指が動かたびに、艶やかな声を上げる朋。

それは悠が、朋という楽器で演奏しているかのようだった。

「あっ・・・あああ。ゆ、悠。もう止めて・・・」

いつもの強気な表情とは似てもつかない泣きそうな表情で、悠に懇願する朋。

だが、その表情に嗜虐感を刺激された悠は、ますます指の動きを強く激しくしていく。

「と・朋ちゃん・・・。そ、その顔、最高にそそられるにや〜」

もはや日本語さえおかしくなり始めた悠。

もし、彼女に尻尾が生えていたら千切れんばかりに振られていただろう。

その顔はだらしなく緩み、涎までたらしそうな有様だった。

「はあ〜はあ〜。朋ちゃん・・・愛してるよ〜」

「や、止めて。許してよ。悠」

ついには、朋のズボンにまで手を掛け始める悠。

朋も抵抗しようとはするが、手を拘束され力の入らぬ体ではモゾモゾと動くのが精一杯。

逆に、その動きがさらに悠を刺激し、彼女の行動をさらにエスカレートさせていく。

「助けて・・・誰か、助けて・・・」

かすれた声で救いを求める朋。

赤く火照った顔。じわりと汗ばんだ肢体。もう長くはもたない。

悠の壊れっぷりは予想以上だ。弘子の言っていた意味が今なら分かる。

だが、もう遅い。今更、気付いても何の解決にもならない。

そこまで考えて、朋はあることに気付いた。

そうだ。この部屋には自分達の他にも・・・。

「助けて！美智子！助けてくれたら・・・助けてくれた男紹介してあげる！」

「分かりましたっ！」

朋の叫び声に素早く呼応する美智子。甘えん坊の未っ子気質。

男という餌の前に、あっさりと仲間（悠）を裏切る。

美智子は、縛り上げた弘子の上から跳ね上がるように立ち上がり、床に転がっていた海豚の抱き枕を拾い上げるやいなや、背後から悠の頭をフルスイングした。

「ムギユウ」×2

心地よい抱き心地を保障する為に、たつぷりと綿の詰まった海豚は遠心力でその威力を高めつつ主人の頭に激突。主従ともに同じような悲鳴をあげるとともに、海豚と悠は床に崩れ落ちた。

「た、助かった・・・美智子、この拘束帯外して」

頭を強打して、目を回している悠の下からはいでる朋。すぐに美智子が寄ってきて彼女の手を巻かれた拘束帯を切る。

そして何か期待した目で、朋を見る美智子。

その様子は、主人からの褒美を待つ子犬のようでもあった。

しかし、現実には甘くない。

「弘子・・・妹を甘やかすのもいいけど・・・今回はかりは駄目よ」

乱れた着衣を直しながらボソリと呟く朋。

その朋の言葉に、ギョツとした表情を浮かべた美智子は、素早く身を翻して逃げようとする。

だが、振り向いた彼女の視線の先には、厳しい顔した姉が立ちふさがっていた。

「美智子、往生際が悪いわよ・・・」

「そんな〜お姉ちゃん！私は悠さんに脅されただけなんだよ！私・・・悪くないよ！」

祈りを行うように両手を組み、目を潤ませながら姉にすがる美智子。しかし、姉は静かに首を横に振るばかり・・・。

「裏切りものは地獄に落ちろ」

罪人に刑を告げるように厳かに言う弘子。

そして、指で首を掻き切るようにして、最後に親指を下をしてみせる

「ガーン！」

訳の分からぬ言葉を発しながら、その場に崩れ落ちる美智子。

その横では、事件の発端となった酔っ払いが気持ちよさそうな寝息を立てていた。

次の日、

第50戦隊女子隊舎の廊下に首から大きな看板をぶら下げて正座する二人の女性の姿があった。

看板には達筆な字で「発情中につき餌を与えないで下さい！」

もう一方には「付け上がるので餌を与えないで下さい！」の文字が躍る。

そのあまりに悪質な行為の為、通報を受けた憲兵隊がすぐに駆けつけたが、二人の姿は、その場から幻のように掻き消えており、事件がおきた場所が女性隊舎というある意味、治外法権地帯であったこと、さらには通報したA中尉が「二日酔いで見間違がえたかも」と曖昧な供述をし始めたこともあり、事件は未解決のまま迷宮入りす

ることとなる。

ただその後、

憲兵隊と司令室に呼び出される4名の士官の姿があったというのは
また別のお話……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6503m/>

Muv - Luv Old Soldiers

2010年10月10日16時42分発行